

あるうさぎとかめ

れーりん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

pixivでの過去の投稿作品です。

童話『うさぎとかめ』をもとにした後日談を含めた作品です。

あるうやうかとかめ

目

次

1

あるうさこぎとかめ

いつだつただろうか。

ワタシがこうして足を運ぶことになつたのは。

— そうか、あの時 —

「やあ、キミはそんなに足が遅いのかい？」

ワタシに調子のいい、身勝手な声がかかつた。

「見ての通り、ワタシはこうして生きてこられたからね」

彼、ウサギは平静を装つたつもりだったのだろうが血相を変えた。  
「そんなに足が遅いんじやあ何処にだつて行けないね。きつとつまる  
ない生き方をしているんだ、そうに違ひない！お笑い草だ。カメの周  
囲の時間が止まつてしまふよ」

小動物の甲高い、森中に響くような嘲笑が続いた。ワタシは少し  
ムツとしたが「そこまで気にすることじやない、無駄なことだ」と受  
け流していた。そうしていると他の獣たちが耳を傾けやつてくる。  
野次馬めいた獣たちだ。何やら面白いことが起きそうだぞ、ジツと見  
てやろうじやないか、と物語る視線だ。そんな光の反射が突き刺さ  
る。

「やあやあ、聞いてくれるかい皆。このカメつてやつに近づくとまる  
で止まつてしまふぞ。食い物も食えたもんじやないな。何せこんな  
に歩みが遅いんだからね！」

周囲の獣たちは「そんなはずはない、冗談だ」と思つていても退屈  
な森とその向こうの丘……そんな偏狭な地には他の楽しみもなく、何  
かの退屈しのぎになるだろうと無言の同調が始まった。

「おいおい、それならカメには近づくわけにはいかねえな……」  
「食い扶持すらありつけないんじやたまつたものじやないね？」

「見てなさい、今に私たちも凍りつく！」

ワタシはとてもじやないがいても立つてもいられなくなつた。こ  
のままじや森中の笑いの種として一生を終えることになる。このま  
ま引きさがる訳にはいかない、とそんな心情が湧いてきた。

「じゃあ証明して見せようか。どちらが足が速いかを競つてみよう」

ワタシのその発言を聞いたとき、全ての獣たちの笑い声が炸裂した。

「いいじゃないか、やつてみせろよ」

「何処がいいか、いい場所を知らないかい？」

「ああ、向こうの山の麓がいいんじゃないか。決着がわかりやすい」

周囲の環境がルールを作つていく。それは逃えたような、ウサギとカメ以外の獣たちがモノの見たさの都合で段取りが進行して決まった。

「じゃあ、この森の一番太陽があたる日向からあの山の麓までだ」

ウサギもさつきの表情を取り戻して、上から目線でこう言つた。

「この勝負、のらない訳はずはないよね」

木々と共に包む獣たちの声に興されて威力を増した言葉がワタシの胸を突き破つた。

「……いいだろう。では明日の、太陽が昇り始めた時間で待つていよう」

そう口火を切つた。敵うはずはない。だけれども、ここで逃げてしまえば負ける以上の屈辱を受けるに違いない、と察知した結果だったのだ。

「じゃあ、その頃にやつてくるよ。しつかり時間を守つてね。ああ、でもその足じや今から向かつても難しいんだろうさ。ここでこのまま待つていいよ」

大風が吹いたように森中が獣たちが声に震わされ、さざめきが止むまでは日が落ちるまでかかつた。

――――――

約束の場所と時間にウサギとカメの両者がやつてきた。獣たちはおらず二人きり。両者共に視線を交わして言葉を使うことなくその場所に佇んだ。静寂に引き金をひいたのはウサギの方だつた。

「あそこに咲いている花が見えるだろう？あの花が揺れたら、スタートだ。いいね」

「わかったよ」

まだ薄暗い森の中には暫し風は吹かず、渡り鳥の声だけが遠くから

伝わるのみだった。時間が止まっているようだった。

葉の間から光が差す瞬間、花が頭を擡げた。

「ゞめんね」

言葉がカメの耳を通り過ぎた。カメは出足を挫いてしまったが、一羽と一頭の約束と獣たちの輪の中で取り決められた誓言に従つて競争は始まった。

ワタシの眼からしたら結果が決まっているようなものだつた。だが一度行われたからには歩みをとめるわけには行かない。その足はウサギのそれよりも遅いだろうが、明らかに普段よりも早く働いているのだ。ワタシのできる精一杯をするのだ。

言葉を繰り返し繰り返し、木々が代わる代わる太陽が昇り落ちようとするまでカメは自分に言い聞かせた。太陽が一番高く上る頃、汗ではなく涙を流し始めた。落ちようとすると頃には頬は乾いた。空が橙色になる頃にようやくゴールが彼の眼に入つた。

「ようやく終わる。一番酷い屈辱からは解放されるのだ」

そう思つた途端に心が軽くなり、重くなつた四肢も全く問題とは感じなくなつた。だが、なんだろう。待つっていた森中の獣たちが不自然な喚声を上げていたのを感じた。嘲笑つた訳でもなく論つた訳でもなく、雲が雲を飲み飲まれるような声だ。ゴールに手をついた瞬間に息を取り戻しつつ、絞るように周りに聞いた。

「ウサギは、もう着いたかい？」

獣の一匹がもぐもぐと近づきこう言つた。

「勝負に勝つたのはあんただよ」

更にもう一匹、甲羅を叩きながら劈く声をあげた。

「あのウサギに勝つとは魂消たもんだぜえ！俺でも梃子摺つてたのによお！」

周りの声が信じられずカメは背を向けた。

彼の眼に映つたのは夕陽に焼かれた丸焦げのウサギだつた。

―――

それから周囲の眼が変わつた。獣たちが褒章と言わんばかりにスタート地点だつた場所にありとあらゆる草が集まつた。カメは食に

困らなくなつたのだ。更に今まで眼もくれなかつた動物にまで声をかけられ様々な話を聞けたのだ。それはとりとめもなかつたが、何よりも満たされた気持ちになつた。

そんなある時、獣たちがいなくなつた日暮れに木陰の裏からあの時のウサギが現れた。

「あの時の、ワタシより遅いウサギじやないか。その鼻声は聞けるとは思わなかつたが」

カメは獣たちの話もあつてか増徴したのか、口も達者になつて言葉が続いていく。

「キミとはもう口も利きたくなつたのだけれどね」

「少しだけ、キミに言わなきやいけないことがあつたんだ」

「へえ……毛がある分の話は聞かないつもりだよ」

「……あの時は、ごめんね」

ワタシは一瞬慚然とした。耳にしたような言葉だつたからだ。だけれど、そんな一言で気分も変わる筈がない。あの時の決着はついて、互いの立ち位置はもう違つていたのだ。

「毛が三本しかなくて助かつたよ。さあ、何処へなりともその足で遠くへ行くといいさ」

「それだけじゃないんだ！お願い、話を聞いて！」

「煩いね。じゃあ、星が満ちるまで時間あげよう。草はたっぷりあるからね」

「……ありがとう」

陽が落ちながら、枝葉も揺れていく。影が伸びて消えそうな頃に漸く声を出した。

「ボクは、ああしなければ生きていけなかつたんだ」

カメは漫然とした。どういうことだろうかと興味が湧いたのだ。

「キミは食べられることは少ないだろう。キミは硬い甲羅があつて強い鱗もある。でも、ボクは違うんだ。いつも鳥や狼に狙われて、それでも走つて逃げてきたんだ」

「……それで、どうしてワタシを愚弄したのだい？」

「ボクの足の速さを森中に知つてもらつて、狙われないようにするた

めだった。そんなことのためにキミを巻き込んでしまつたんだ。だから、お詫びにきたんだ」

そういうと、ウサギは先の木陰の中から草の束を持ち出してきた。「言葉だけじゃたりないよね。だから、ボクの知つてる一等の草を持つってきた。よかつたら、夕食にたべてみてくれないかい?」

ワタシは侮蔑と憐憫の秤にかけられたようで、どうもこうも言いようがなかつた。時間が経つて星が満ちそうな頃、ウサギが持つてきた草を口にした。するとどうだろう、今まで獣たちが持つてきた草よりもはるかに透き通つた瑞々しさを持つた、いつまでも長く味わえるような歯ごたえのあるものだつた。これには表情を変えざるを得なかつたようだ。

「気に入つてくれたようでとても嬉しいよ。よかつたら、これから足りなくなりそうだったら持つてくるし生えてる場所も教えるね」「こんな草は食べたことがなかつた。今まで獣たちが持つてきたものとは大違ひだ」

「そりや、あいつらは草じやなくて別のものも食べられるからね」「これは、何処に生えているのかな?」

「あの山の麓があつただろ?それとは真逆に行くと泉が二つあつてね。ここは少し離れているけど、ちょうどここは三角形になる位置なんだ。キミが許すなら、案内したいけれど……どうだろ?」草に夢中で気づかなかつたが、どうしてだろうと、ワタシが気になつてふと顔を覗いてみた。瞼が潤つっていたのだ。

「……明日の夜明けに出向いてもよろしいかな?」  
ウサギは表情を輝かせた。

「ああ!もちろん、請け負つたよ!」

一羽と一頭は、和やかに星の下で眠りを迎えた。

――

鳥たちが鳴きだした頃に、ウサギとカメは目を覚ました。

「さて、じゃあ案内するよ。ゆっくりついて来てね」

「ああ、お願ひしよう」

そうして森の中を進み始めた。道は平坦でもあってカメはある疑問を思いついた。

「そいいえば、どうしてキミはあの勝負に負けてしまったんだい？」

「実は、思い切り走りすぎて……疲れ始めた頃に転んでしまって足を怪我してしまったんだ」

ウサギを見遣ると、その通りらしい。歩みがぎこちなくなつていた。

「あの勝負に負けた後は怖かつたよ。何せボクを狙つていたあいつらが眼の色を変えて襲いかかつて来たんだから。それよりも、キミに謝らないことがボクにとつて痛かつたんだ」

「そうだつたのか。その怪我は治りそうなのかい？」

「どうだつた。今まで怪我をしなかつたからわからないや」

太陽が真ん中に上がつた頃に一つの泉に辿り着いた。

「ここ」が一つ目の場所さ。キミに持つてきた草はここからとつてきたんだ

「どれ、昼食がてら食べてみよう」

「ボクもそうするよ」

泉の水の音と日差しの心地よさもあつてか、昨夜より以上に豊かに感じられた。

「本当に、キミの言つている通りのものだ。こんなところはいつもじや足を運ぼうともしないよ」

「皆は見栄えのいい山の麓にばかり行くからね。退屈そうなところには行かないだろう？」

「それもその通りかもしれないな。ワタシもそちらの方が風通しもよく感じられるからね」

「もう一つの泉はまた別なのさ。食べ終わつたら向かおうか」

一羽と一頭はまた進み始めた。次の道は少し叢の高い茂つた通りだつた。

「わかりにくいかもしれないけれど、影を頼りに進めば着くからね」

太陽から受ける光が影を作つて、それが方向を示してくれている。「流石に、ワタシの身体では動きづらいな」

「そうかもしだれないので、キミがこの道を進み続けるときつと道も  
できてくるよ。もう少しだけゆつくり進もうか。ここではボクも多  
少は安心して道を進めるからね」

そうしていくと漸く開けた、先のよりも広い泉が現れた。土は泥濘  
を帶び水面は広く、泉の底が窺えるほど澄んでいた。

「今いる泉の向かい側に生えているんだ。足を踏み外さないように気  
をつけて」

「ワタシが沈んでしまうことはないのかね？」

「少しだけ離れれば足が汚れる程度さ」

泉に沿つて向かい側に着くと、少し背の低い樹が幾つか立つてい  
た。それにはとても小さな黄色を帶びた白い花たちが淑やかに咲い  
ていた。その木から半歩ほど離れたところに、先のよりも深く青々と  
した小さい草が生えていた。影を意識しなくなるほど日が傾いてい  
た。

「これらだよ。もう夜に近いから、これらを夕食にしようか」

「そうするとしようか。暫くこうして動くことはなかつたから少し疲  
れたよ」

そうしてワタシたちは草を食んだ。口の中は、滋味を感じさせる柔  
らかな香りに満たされた。深みのあるそれでいて落ち着いた気分に  
させる味だった。

「これは、先のとは違うけれどうまいものだ」

「うん、そうだろ。ここには風が広く渡つてくるから、今の時期には  
ちょうどいいんだ」

「季節は夏に近い。それにそこの樹が木蔭がみえる」

「暑くなつたらそこで一眠りするといいんだ。風が涼やかに覆つてくれるから」

そうして星が空を動き始めた頃に、カメが口を開いた。

「キミには、多くのことを教えてもらつた。今日来た道とは今まで縁  
のなかつたよ」

「お気に召したかい？春と秋には向こう側の泉、夏にはこここの泉に來  
るといいよ。秋には向こうの草も葉も変わつていて、キミに気に

入つてもらえたならそれなら溜飲が下がつたようなもんだね」

「ああ、これには礼を言わねばならない」

「そんな、礼なんてどんでもない！ボクは謝りたかつただけなんだ。そのお詫びとしてそのまま受け取つてくれればいいんだ……それと、ボクを許してくれるかい？」

「キミの事情は知らなかつたし、こうして新天地を拓いてくれたのだ。こちらとしても例の一つとは言わないが、キミを許そう」「……ありがとう」

ウサギは空を見上げた。星たちが意地の悪いことをした。頬を撫でる涙が煌かせた。暫しして、いかにも毛づくろいするように耳や顔を擦つて、改めてカメに向かつて彼はにこやかに言つた。

「さあ、もう眠ろうか。今日は疲れただろうからね」

「……ああ、そうするとしよう」

冷たい風が被さるようにして、一羽と一頭は眠りについた。

――――――

目覚めたときにはもう朝を通り越して昼近くになつていた。きっと昨日の疲れと食事で満足した腹のお陰なのだろう。ウサギはどうに目を覚まして木蔭に佇んでいた。

「やあ、おはよう。漸く目覚めたのかい？」

「そうだね、快い気分だ」

「へへ、それはよかつた」

そうしてウサギは腰を上げた。

「ボクはそろそろ森に向かうよ。穴倉など見て廻らないといけないから」

「ワタシは森に戻る気分すらなくしてしまつたようだ。冬眠する頃合には戻るつもりだがね」

「じゃあ、ボクはキミの様子を伺いに来るよ。気分が変わり次第、先の泉のどちらかを選べばいいからね」

「あいわかつた、それではまたいざれ」

「ああ、じゃあね」

そう言うと叢に飛び込んで森に向かつて跳ねて行つた。

しばしばウサギはカメのもとに顔を出してきた。その話の中では、獣たちがどのようにして生きているか、渡り鳥たちが世界を巡つて季節を追いかけるようにして旅をして土産話をしてくれることなど話を届けてくれるのだった。一方カメは、ずっと長く生きてきたけれども不満はなかつたこと、今まで孤独というものを味わうこととなかつた事など年の功とも言うべき話を持ち出して、互いに夏と秋を過ごしていった。前の獣たちと同じような話具合だったが、それとは別の感情が芽生えていた。足しげくいつも変わらぬようだが、ぬくもりを感じさせるものだった。

ふと思いついたかのように、カメはウサギに尋ねた。

「あの日向、獣たちが草を持ち寄つてきた場所はどうなつてているのかい？」

「あそこかい？ 獣たちは草を持つたけれど、キミが現れなくなつて暫くはもう誰も持つてきてはいないよ。種種雑多なものばかりだつたから、入り交わつて腐り始めたんだ。そのせいか誰も近寄ろうとはしないんだよ」

「なるほどね、でも、ワタシは冬眠するまでは戻るつもりはないよ。キミの教えてくれた居場所があまりにも心地いいものだからね」

「ボクは森の中を転々としているから、何か気になることがあれば見てくるよ」

「ああ、頼んだよ」

そうして秋が過ぎる頃、冬眠をするためにカメは森の中に戻つた。その頃にはウサギが言つていてように泉二つの間に獣道が生まれていたのだ。

「そりいえばあのウサギはぱたりと来なくなつてしまつたな」

気になり始めて、あの日向に足を運んでいた。

獣たちが今までに集めた草の上に見なれた毛皮が散らばつていた。その上は赤黒く滲んで、残つた血肉には蛆が湧いて蠅たちが飛び回り、その影が無残な姿を搔き乱し、その有様をやら滅多に躊躇していた。カメはまさかと思つてたまたま通り過ぎた鳥に尋ねた。

「なあなあ、このウサギはどうしてこうなつてしまつたのだい？」

「ああ、そこの屍かい？ある獸に襲われて逃げられなくなつたところ喰われちまつたのさ。その声は空に届くような高い声でね。その後の声は聞けたものでは無かつたよ」

「だ、誰に喰われてしまつたのだ？」

「知らないね。きっと食つたやつしか知らないよ。俺も知つたこつちやないからね。因果応報というだろう。キミを馬鹿にした報いなのさ」

そういうと、鳥は飛び去つた。

カメは静寂を保つたあと、慟哭した。声を荒げて川のように流れる涙を抑えきれなかつたのだ。その響に周りの獸たちがやつてきて、カメから距離を保つてこう言つた。

「おつと、カメのやつが久しぶりに戻つてきだぜ」

「あんな場所には誰も来やしなくなつたつてのに」

「きつと嘲笑つたあのウサギが死んで喜んでいるのさ」

そう言い合つた後に獸たちは去つて行つたが、カメは三日三晩泣くのを止めなかつた。ウサギの足の怪我が治つていなかつたこと、獸たちがどう生きていつているかという話を思い出せば自明の理だつた。日が過ぎるにつれて、今まで味わつてきたのとのなかつた深い暗闇がカメの心の奥底を埋め始めた。

「もうここには戻つてくることはできない。こんな記憶を持つてここにいたら死ぬよりも辛い呪いに囚われてしまいそうだ」

そうして、カメは悲哀を抱えつつずつ居座つていた冬眠の場所へと戻つた。

―――

幾年月季節が代わる代わる、カメはウサギの教えてくれた泉の二つを往復していく。冬眠をする度に森の中に戻つて行つた、があの日向へは絶対に近づこうとはしなかつた。季節が顔を出す度に渡り鳥たちがカメのもとにやつてきて土産話を持ちだしてきた。それはカメ自身の知らない世界の話ばかりでとても刺激に満ちていた。それでもウサギのことを忘れられはできなかつた。またカメに疑問が浮

かび渡り鳥たちに尋ねた。

「今までワタシにこんなに楽しい話を持つては来なかつたが、どうして話してくれるのだい？」

「ああ、もういなくなつたウサギに頼まれてたんだよ」

「自分よりも寿命が短いだろうからつてさ」

「だから、お前が寂しい思いをしない様につて頼まれて……あいつは色んな木の実を持つてきたんだよ」

「不思議なことだつたがいい思いをさせてもらつたからね。その義理つてやつよ」

ワタシは久しく心を突き刺された。こんなに新愛を与えてくれたウサギの姿がより鮮明に戻つてきたのだ。奥底を蠢いていた暗闇がすうと落ちていつた。ウサギのことを思うといてもたつてもいられなくなつたが、あの場所に戻る勇氣には届かなかつた。

「……答えてくれて礼を言う」

渡り鳥が飛び去つた後に一つの泉が波立つた。星の移つた水面が揺れて光を躍らせ、風が叢を靡かせざわめかせた。その中にしくしくと声が密やかに細々とした声が通つた。

――――

またずつと幾年月の間にカメは衰えていつた。少しも不満も無い生をおくつたことだろう。そして熟成されていつた時間の中での凝が解れていつたカメは何を思い立つたかは自覚しなかつたが、あの日向を避けながら山の麓まで足をゆつくり動かし始めた。

――豊かで数奇なものだつたな――

ワタシは思い出す。ウサギの挑発、獣たちからの一瞬の栄光、短い期間にウサギの与えてくれたずつと長く続く贈り物、彼の惨い最期、今まで感じられなかつた孤独とそれを埋めるかのようなウサギと渡り鳥との残していく約束。一泊二日ずつと思い返してながら、空に頭を擡げて胸がすく気持ちになつて空に向かつて微笑んだ。カメはその二日かけて山の麓と森を往復した。

――ようやく、ここにこれた――

森の中で一番温かい場所。あの時のスタート地点だ。もはや死臭

はなく肥やしななつた草だつた土の上に、一つきりの骨の中、花が咲いていた。

「あの時と同じような花が揺れた時、お互いに出発したな」

ワタシはその花に近づいて身体を落とし、目を閉じた。

—今度は先に着いちやつたね。待っていたよ—

—ワタシもようやくキミとまた会えた—

—さあ、今度はゆつくり進んでいこう—

カメはもう目覚めることはなく日向に柔らかな光が広がつた。  
一羽と一頭の間の花が、密やかに風で揺れた。